

最貧困女子

原 千里

先日、市議会の一般質問を傍聴した。質問者は、女性の代表を自認する女性市議。質問事項は、「子どもの貧困と教育格差について」であった。「子どもの貧困が深刻な教育格差を生んでいる」との同市議の指摘には鋭さと迫力を実感。教育委員会の答弁が傑作である。「学力格差はあるが、教育格差はない。同じように扱っています」旨の発言には、「笑止千万」の思いを禁じえない。大学や大学院の研究者たちのこの件に関する研究論文を何本も読んでいただけに失望。実におかしい。

二〇一四年一月に放送されたNHKクローズアップ現代「あしたが見えない―深刻化する『若年女性』の貧困―」は大きな反響を呼んだ。貧困は、若い女性に限ったことではない。最近、貧富の差がことのほか広がってきたように思う。一部大企業は、アベノミクスとやらで確かに潤っている。だが、その恩恵を享受しているのは日本人のほんの一部の人たち。多くは、あえいでいる。経済格差が増々ひどくなりつつある。さらに、そうした格差が教育格差をもたらしている。それが偽りのないところである。

最近、鈴木大介著『最貧困女子』（幻冬舎）を読んだ。働く単身女性の三人に一人が、年収一四万円未満。さらに、地獄のような世界でもがき苦しむ女性たちがいる。家族や地域、そして制度にも頼れず売春などで日銭をかせぐしか生きる術がない「最貧困女子」もいる。

①初めての売春は小学五年生。「身体が売れなくなつたときが死ぬときだ」と言う身体中に虐待の傷跡を持つ一六歳の少女②風俗店に次々と面接落ち。出会い系サイトに書き込み、一晚五〇〇〇円で売春することもあつたシングルマザー③知的障害を抱える母親のもとを家出し、同じく知的障害をもつ姉と二人で売春を続けた少女④街娼する母親のもとに生まれ、今は売春で得た金で母と弟たちを養っていると誇らしげに語る中学生―などの取材レポートは生々しい。「事実は小説より奇なり」。

シングルマザーや母子家庭は、増加傾向にある。こうした親を持つ子どもたちの貧困が深刻な社会問題へと発展していくケースが少なくない。親に捨てられ、学校からも逃避。誰にも頼れず、体を売り非行に走りやつのその日暮らし。空腹に耐えながら路上生活の日も。そんな小中学生もいる。

貧困、無学、無知。故に、ちゃんとした定職に就けない。まさに、「負の連鎖」である。どこかで断ち切つて欲しい。本人の決断と努力だけでは限界。「貧困は自己責任」とは言い切れない。現実的支援が不可欠。批判や差別は許されない。

そんな思いを深くした市議会傍聴であつた。